

◆八木健選 ～奥坂まや句集『うつろふ』を読む～

これまで俳句雑誌などにとりあげられた作品を目にすることはあっても、奥坂さんの句集を読むのは初めてである。読後感として、まず第一は、作者が季語にしっかり向き合っているということである。そして、時と場の臨場感をもちながら独自の個性的な表現が諧謔味を醸し出していて楽しい。作者の承諾を得ずに「滑稽俳人」と呼ばせていただきたいほどである。

造り滝みづべらべらと落としをり

「みづべらべらと」は、水の落ち方を写生してのオノマトペだが、造り滝を安直なものと感じているからこそであろう。本物の滝はこんなもんじゃないという思いが滲んでいて可笑しい。造り滝を擬人化しているから、ひとまず造り滝も滝の内として認めてはいるのだが。

西日との押し問答や四畳半

「西日の当たる四畳半」とくれば、不動産屋がどう言いくるめようとも暑くてたまらん部屋だ。句は不動産屋とではなく西日と押し問答するというから面白い。西日の立場からすればいつもの通りに日差しを届けているだけのことだが、住人にとってはその暑さは迷惑なだけ。西日を擬人化して可笑しい。

本ひらくやうに冬青空仰ぐ

「冬青空仰ぐ」のがなぜ「本ひらくやうに」なのか。空を仰ぐ感覚が「本ひらくやうに」だったのである。前を向いていた顔を上に向けた時、顔の大きさが変わるわけでは無いが、顔が開く感じがした。その感性と「本ひらくやう」と例えた表現が魅力的である。

虚を掴むごとく置きあり革手套

革手袋は形状記憶合金のごとく手袋をはめていた人の手の動きを温存する奇妙がある。手袋に残された手の形を「虚を掴む」と捉えたところが表現の妙である。

洗はれて意気軒昂の大根かな

擬人化が効果的な句である。なぜ意気軒昂なのかを読み取ってみたい。大根は洗われると真っ白になる。しばらく前までは土がついていたのだが、洗われた途端に自身の純白に気づいて誇らしく思ったのである。白いぞ太いぞさあ来いとばかりに威張る大根。売り手の意気軒昂とも重なるか。

啓蟄やどかどか干され柔道着

「啓蟄」は二十四節気の一つで、冬籠りしていた虫が這い出てくる頃という春の季語である。この季語を柔道の稽古着と巧みに組み合わせている。これから柔道の稽古が本格的になる。新入生も入ってきてこれまで以上に稽古場が躍動的になるのだろう。そのエネルギーを「どかどか干され」と表現して可笑し味が出た。

背中犇く駅の階段終戦日

山手線の某駅の階段。下からふと見上げると、そこには無数の背中が犇めいている。それらは、何者かの号令にただ黙々と従うだけの、思考を奪われた者の背中と重なるのである。

寒晴や高さ食るビルの群

良く晴れた空を我が物顔に占領する高層ビル群が高圧的に感じられることがある。足下に蠢く一戸建てや古い集合住宅を睥睨して居丈高である。「高さ競う」くらいなら誰でも思いつくが、「高さ食る」の擬人化が人間の食欲を匂わせて上手い。

熱帯夜都会は無音怖れをり

滑稽は「裏切り構成」により生まれることが多い。「騒音を怖れる」のは当たり前の発想。この句は常識を裏切る。季語の「熱帯夜」には耳を覆いたくなるほどの喧騒が似合うからなおのこと。

冒頭に「季語にしっかり向き合っている」と感想を書いたが、奥坂さんは、『うつろふ』のタイトルについて「あとがき」に次のように書いておられる。

一日の生で終わる蜉蝣も、何十億年か存在する銀河も、季語はすべて、「うつろひゆくもの」「滅びゆくものです。私も「うつろひゆくもの」のひとつとして、願わくば死を迎えるその時まで、季語に捧げる俳句を詠み続けたいと願っております。

奥坂さんの作品には、今を生きている者として季語に向き合っていればこそ生まれるリアリティーがあり、軽妙さがある。このような姿勢でお詠みになった作品の中に、奥坂さんにはご迷惑かもしれないが、滑稽を共感できる句を発見できたことは嬉しいことである。

◆奥坂まや氏は、昭和二十五年、東京生まれ。昭和六十一年「鷹」に入会し、藤田湘子に師事する。平成二十年より鷹同人会会長。俳人協会および日本文藝家協会会員。NHK文化センター講師、朝日カルチャーセンター講師としても活躍。句集に『列柱』（俳人協会新人賞）、『縄文』『妣の国』がある。評論集の『鳥獣の一句』『飯島晴子の百句』など多数執筆。現在、東京都在住。